

『覚一本平家物語』の「まさなし」と「うたてし」

——語句分析から伝本の相違を考える——

城 阪 早 紀

はじめに

一般に平家物語という書名は、「平家物語」と称される伝本群（と「源平」を冠する伝本）の総称であり、当然ながらこれらは多くの共通項を持つ。しかしながら、同時に多くの相違点も抱えており、時にそれは物語の質に関わる場合もあるように思われる。

平家物語の伝本群が、具体的にどう違うのかを知りたい。そう思った時、まず始めに取るべき方法は、物語中の出来事や説話を年表のようにまとめて構成を比較する方法や、章段や説話の本文を対照させて表現を比較する方法であろう。

かつて稿者はこうした方法とともに、同一語句の使用の様相からも知ることはできないかと問題提起したことがある^①。同一語句であっても、伝本ごとに用例数や意味の分布は異なっており、また、ど

の場面での人物に関わって出現するかという点にも相違がある。そこから伝本の性格を考えることはできないかという試みである。

右のような問題意識から本研究では、形容詞「うたてし」と「まさなし」を取り上げる。本稿でまず『覚一本平家物語』（以下「覚一本」^②）の用例を検討し、その結果を、次稿で検討する『延慶本平家物語』（以下「延慶本」^③）の結果と比較することで、相違点を明らかにしたい。

「うたてし」は批評句として使用されることのある、編者が物語中の出来事や人物をどのように捉えたかを知る手がかりになる語である。また、「うたてし」と同様に負の評価を示す語として「まさなし」がある。たとえば、熊谷直実が戦場でうしろを見せた平敦盛を、遊君遊女らが富士川から戦わず逃げ帰った平家軍を、それぞれ「まさなし」、「うたてし（せ）」と言う例がある。

『覚一本平家物語』の「まさなし」と「うたてし」

・熊谷「あれは大將軍とこそ見まいらせ候へ。まさなうも敵にうしろをみせさせ給ふものかな。…」(覚一本・巻九「敦盛最期」)
 ・海道宿々の遊君遊女ども「あないま〜し。打手の大將軍の矢ひとつだにもゐらずして、にげのほり給ふうたてしさよ。…」とわらひあへり。(覚一本・巻五「五節之沙汰」)
 「うたてし」は、「まさなし」とどのように異なるのだろうか。
 「まさなし」との意味の違いを踏まえつつ、物語中で「うたてし」と評される対象が、どのような事柄であるのかを明らかにすることによって、覚一本編者の視座を読み解きたい。

一、研究史、語句分析と平家物語

語句の分析から物語世界を解き明かす試みには相応の蓄積がある。殊に覚一本の分析においては池田敬子氏の論考があり、氏は覚一本が人物造型に関わることを厳密に使用することによって「編者の構想を実現」していることを明らかにしている^④。

池田氏は、続く一連の論考において『平家物語』と『太平記』を讀んでの「率直な第一印象の違いの強さ」は、「決して特異ではない語」の「用法・語義範囲の相違」に由来するのではないかという目論見のもと、「悪行」「ゆゆし」「あさまし」「うたてし」などの語句の分析を続けてきた。^⑤

「あさまし」について、『平家物語』(覚一本)巻四・五の使用例は、「清盛の王法破滅の悪行、さらに仏法破滅の悪行までを含めた悪行全体と呼応する」と述べる。そして『平家物語』「諸本」は、「それぞれの編集者の意図によって言葉」を「使い分け」ており、「清盛(平家)の悪行に呼応するように『あさまし』を配する」のは「覚一本の言語感覚」によるものとする^⑥。一方「うたてし」は、「基本的に発話者自身の不快・拒否の心情を表す語」で、「より人間の心情に密着して具体的な個々の状況に対して発せられる語」であると言う。そして、「あさまし」が「世」などという大状況を批評」できる「編者の理知的な思想をあらわす」とすれば、「うたてし」は「編者の主情的な情緒を表現する、読みようによっては編者の感情の本音を読み取りうる語である」と結論する^⑦。

なかでも、『平家物語』諸本の「あさまし」の使用には異同が存在」することから、覚一本の、延慶本や屋代本とは異なる「編集者の意図」を指摘したことは重要である。池田氏は、「覚一本の言語感覚」を読み取るが、のみならず他の伝本、たとえば依拠資料の痕跡を多く残すとされる延慶本についても、編者の意図を読み取ることはできないだろうか。

一方で『平家物語』と『太平記』との比較に重きを置いたためか、『平家物語』(覚一本)の結論としては首肯しがたい点も残されている

るように思われる。たとえば氏は、「あさまし」を「理知的な思想」、「うたてし」を「主情的な情緒」を表す語とするが、改めて覚一本の用例を見つめ直すと、池田氏の整理とは逆の、主情的な「あさまし」や、理知的な「うたてし」の例も認められるように思われる。

「うたてし」について言えば、氏は「強い情緒的拒否感を示す例」として、覚一本から5例をあげる。これらが強い情緒的拒否感を示すことに異論はないが、これらは全て会話文と心内語の例である。これらは、話者の置かれる立場や状況に多くを依存するため、まずは地の文の用例と分けて分析したほうが良いように思われる。

また地の文で藤原成親・源頼政・平宗盛に向けられる「うたてし」について、池田氏は次のように述べる。

「謀叛」である限りこれらは鎮圧されるものであり、起こしたものは減じるのである。なればこそ「あさまし」ではなく情緒的な拒否感の強い「うたてし」が選ばれるのであろう。

こうした場面で「うたてし」が使われていることも「情緒」性に関わってのことなのか、いま一度用例に立ち返りたい。

さて、「まさなし」については鈴木彰氏の^⑧の論考がある。鈴木氏は延慶本と覚一本の用例から、「まさなし」は「自分にとって不都合な状態への不満や抵抗の意を表明する言葉」であるとすると、そして、「すべて戦場（またはそれに類する状況）における、武者の発言と

して現れる」ことから、「戦場に臨む武士たちの精神性を表すための言葉」と解する。さらに「敵にこの言葉を投げかけられたら、武士としての自意識が大きく刺激され、いわれるがままには放っておけないような語」であるとして、直実が発した「まさなし」も、「敦盛の武士としての精神性を揺さぶる語」であったと言う。

また『平家物語』の語り手は、戦場から離脱することを必ずしも批判の対象とはしていない」と述べ、敦盛が引き返さなかったとしても批判されることはなかったとする。にもかかわらず直実は「まさなし」という語であえて評して敦盛の感性に突きつけた、という設定^⑨がとられており、直実が「挑発的な偽りの言葉」として「まさなし」を発したことは「詐術」として受け止めるべきと述べる。

「まさなし」は覚一本に8例、延慶本に3例ある。鈴木氏の指摘するように、全てが武士の発言にみえ、相手の行動を変える強い語であることが窺える。しかし、「まさなし」が「自分にとって不都合な状態への不満や抵抗の意を表明する言葉」であるとして、その言葉を敵から投げかけられることが、どうして「武士としての精神性を揺さぶる」ことにつながるのか、という説明が必ずしも明瞭ではないように思われる。「まさなし」が相手の行動を変える強い語である理由は、「精神性」を持ち出さずとも説明できるのではない

だろうか。

次章では「まさなし」という語が発せられる状況を、改めて検討したい。

二、「まさなし」

①「まさなし」の辞書的意味

「まさなし」は、「否定的な評価を表す」（『角川古語大辞典』）語である。『日本国語大辞典』（第二版）は「一般的な規準に合致しない」意を示す語とし、『角川古語大辞典』は「中世語の勿体無（もつたいなし）に近いが、それほど厳しくはない。『まさなし』の評価基準は、その社会の秩序・規範についての意識、たしなみ、また美意識など」とする。また『平家物語辞典』も「この語は、その時代人の常識・共通感覚を背負って発せられている」と述べる。「まさなし」が「その時代人の常識・共通感覚」「規範」に基づいて発せられる例は覚一本以前にも例があり、この語義が覚一本の解釈においても重要と思われる。^⑩

たとえば、自害しようとする重衡に「まさなし」と言う例がある。

1（重衡）腹をきらんとし給ふところに、梶原よりさきに庄四郎高家、鞭あぶみをあはせて馳来り、いそぎ馬より飛おり、「まさなう候、いづくまでも御共仕らん」とて、…（巻九「重衡生捕」）

『日本古典文学大系（大系）』は、頭注に「自害してはいけません」と示し、補注（巻八「妹尾最期」）で「『まさなう』は、従来国語辞書では、卑怯（ニ）（モ）と解するのが普通であった。しかし、平家物語を見ると、「まさなし」は好ましくない状態に広く言うようであつて」「相手の言行に対する反対以上に意味はない」と述べる。^⑪

対して富倉徳次郎氏は『平家物語全注釈』（巻八「瀬尾最後」）で、「大系」は「卑怯にもつて諷刺を排するが、この語に對貴人の用例のあることにとらわれた誤訳である。用例は敵對關係の場に用いられ、特に合戦の慣用句と見なされるので、このような場合には当然罵倒の敵意を含んだものと見るべきであろう」と反論する。「對貴人の用例」とあるのは、おそらく庄四郎高家が重衡に言つた例を指すものと思われる。

その後も諸注に言及はあるものの、一致には至っていないように思われる。次節では、覚一本の「まさなし」を検討することで、重衡に向けられた「まさなし」の意味するところを明らかにしたい。

②覚一本の「まさなし」

覚一本に「まさなし」は8例あり、全てが武士の口語である。延慶本にも同じ場面に見える1例は、用例番号を丸囲みで示す。

次の5例は、戦場で敵に対して言うものである。

2 (兼康) あはひ一町ばかりに追付て、「(成澄) いかにも妹尾殿、まさなうも敵にうしろをば見する物かな。返せやかへせ」といはれて、板倉川を西へわたす河中に、ひかへて待懸たり。

(巻八「妹尾最期」)

③ (敦盛) 「(直実) あれは大将軍とこそ見まいらせ候へ。まさなうも敵にうしろをみせさせ給ふものかな。かへさせ給へ」と扇をあげてまねきければ、招かれてとつてかへす。(巻九「敦盛最期」)

4 (行家) 蔵人うしろなるぬりごめの内へしざりいらむとし給へば、常陸房「まさなう候。ないらせ給ひ候ぞ」と申せば、「行家もさこそおもへ」とて又おどり出た、かふ。(巻十二「泊瀬六代」)

これらは、兼康・敦盛が敵にうしろを見せること、行家が戦いの途中で塗籠の中に退くことに対して、「まさなし」と言うものである。

「まさなし」と言われた人物は、皆逃げることを止めて応戦する。

鈴木氏は「戦場から離脱すること」は「必ずしも批判の対象」ではないと述べたが、他方で、敵に「うしろ」を見せないことを是とする規範意識も認められる。たとえば、木曾義仲の「いまだ敵にうしろを見せず」(巻八「越前判官」)や、梶原景時の「しぬるとも敵にうしろをみすな」(巻九「二度之懸」)といった発言に顕著である。

敵にうしろを見せるのは良くない」という原則がまずあって、その状況や立場によって例外もしばしば認められる、と考えるのが穏

やかであろう。

また則綱は、降参した者の頭を取ることを「まさなし」と言う。

5 (盛俊) 「(盛俊) …にツくい君が申様哉」とて、やがて頸をか、んとしければ、猪俣「まさなや、降人の頸かくやうや候」。越中

前司「さらばたすけむ」とてひきおこす。(巻九「越中前司最期」)

決着のついた土壇場で申し出ると言うのが例外的だが、降人の頭を斬つてはならないということ自体は、道理にかなったものとみて良いだろう。^④

次の2例は、味方に対して言う例である。ただし味方といっても、先陣争いの場面で、相手との間に利害関係が生じている。

6 (義経) 梶原申けるは、「けふの先陣をは景時にたび候へ」。判官「義経がなくばこそ」。「まさなう候。殿は大将軍にてこそまし〜候へ」。判官「おもひもよらず。鎌倉殿こそ大将軍よ。義経は奉行をうけ給たる身なれば、たゞ殿原とおなじ事ぞ」

(巻十一「鶏合壇浦合戦」)

7 (成田五郎) 「(季重) …もみもうで(成田に)おツついで、

「(季重) まさなうも季重ほどの物をばたばかり給ふ物かな」といひかけ、うちすててよせつれば、…」(巻九「二度之懸」)

梶原景時は、大将軍である義経が先陣を懸けることに対して「まさなし」と言う。義経はその、大将軍は先陣を懸けてはならないとい

う言い分を認めた上で、大將軍は頼朝であり、自身は「奉行」であるから先陣を懸けても問題ないと返している。

季重は、成田が「死なば一所で死なう」、「さきがけばやりなし給ひそ」と言ったにもかかわらず、その約束を破ったことを「まさなし」と言っている。

残る1例は、戦場ではないが敵に対して言う場面である。

7 (義経)「義経」……ろざしの程、尤神妙なり。和僧いのちおしくは鎌倉へ返しつかはさんはいかに」。土佐房、「まさなうも御錠候ものかな。おしと申さは殿はたすけ給はんずるか。鎌倉殿の『法師なれども、をのれぞねらはんずる者』とて仰せかうぶツしより、命をば鎌倉殿に奉りぬ。なじかはとり返し奉るべき。たゞ御恩にはとくく、頸をめされ候へ」 (卷十二「土佐房被斬」)

土佐房昌俊は、「和僧いのちおしくは鎌倉へ返しつかはさん」という義経の言葉に対して「まさなし」と言う。土佐房が「まさなう」と言ったのは、提案を受け入れたとしても義経が助けることはないと思っただからであろう。心にもないことを言うものではない、それは不文律に反する、という意味での「まさなし」であろう。¹⁵⁾

以上をまとめると、次のようになる。まず「まさなし」は武士の口語である。「まさなし」を発する人物に平家方はおらず、源氏方、頼朝・義経・義仲配下の、身分が高いとはいえない人物が多い。そ

して「まさなし」と言う相手は武士の中でも、敵や先陣を争う味方といった、利害関係のある相手に限定される。「まさなし」は、敵にうしろを見せてはならない、降人の首を斬ってはならない、大將軍が先陣をかけてはならない、といった戦場(という特殊な空間)での不文律のものを含んだ規範性に根ざした語であり、それに反した時に発せられる語である。言われた相手が、逃げるのをやめて引き返したり、頸をかくのをやめたりと行動を変えるのは、言われた相手も「取るべき行動ではない」という感覚を持ち合わせているからといえよう。とすれば、直実が放った「まさなし」も、あくまで敵にうしろを見せるのは良くない、という規範性に基づいて発せられた語であり、「詐術」とは見なせないように思われる。

さて、重衡に向けられた「まさなし」はどう解釈すべきだろうか。重衡が腹を斬ろうとしたのは、敵を目前にした、浅瀬であった。

三位中将敵は近づく、馬はよはし、海へうちいれ給ひたりければ、共、そこしもとをあさにてしづむべきやうもなかりければ、馬よりおり、鎧のうは帯きり、たかひもはづし、物具ぬぎずて、腹をきらんとし給ふところに、… (卷九「重衡生捕」)

兼平が義仲に、「あの松の中で御自害候へ」と戦場を離れるように言った例(卷九「木曾最期」)や、痛手を負った頼政が「心しづかに自害せんとて、平等院の門の内へひき退」いたこと(卷四「宮御

「最期」を考え合わせると、大將軍など身分ある武將は、しかるべき場所、しかるべき作法に則って自害すべきと考えられていたことが窺える。

高家が言った「まさなし」は、単に反対の意を示したもので、相手を罵倒するものでもなく、規範意識に則って、「ここでの自害はなりません」と相手の行動を制する語であった。であるからこそ、重衡は思いとどまるを得なかったと考えられる。

三、「うたてし」

①「うたてし」の辞書的意味

「うたてし」は、副詞「うたて」（もとは「うたた」）が形容詞化した語である。現代語の「いやだ」「嘆かわしい」「情けない」といった負の感情を示す語とされるが、『古語大鑑』はこれらを、対象によって分類する。すなわち、「自分のおかれた不遇・不当な状況」に対する感情は「不本意だ。情けない」であり、「他人の不適當な行動・振舞」は「腹立たしい」、「他人の不遇・不運」は「気の毒だ」あるいは「哀れに思われる」というようである。「うたてし」と評される対象を明らかにしようとする本稿においてもこの分類法は有効と思われる。

『覚一本平家物語』の「まさなし」と「うたてし」

②覚一本の「うたてし」

覚一本には、形容詞「うたてし」が17例あり、その派生語5例¹⁶をあわせて22例が認められる。延慶本にも同じ場面に見える6例には、用例番号に丸囲みを付す。覚一本22例の内訳は、地の文が13例、会話文が8例、心内語が1例である。地の文は、13例全てが編者の評である。

会話文と心内語の話者をみると、知盛・重衡・維盛・六代と平家一門が計4例、成親北の方と遊君遊女とで女性が2例、瀧口入道（聖）が2例、信連が1例である。「まさなし」との相違として、話者が武士である例はあっても、戦場での発話や戦法に関して言う例がないこと、僧（仏法者）や女性の発話にも広くみえることが指摘できる。ただし冒頭で述べたように、武士の行動を「うたてし」という点で、富士川からの敗走を言う例が「まさなし」と近似する。

A 会話文・心内語（9例）

1 自身の不遇・不当な状況に対する感情 6例

1（信連）信連申けるは、「只今御所へ官人共が御むかへにまいり候なるに、御前に人一人も候はざらんが、無下¹⁷にうたてしう覚候。信連が此御所に候とは、上下みなしられたる事にて候に、今夜候はざらんは、それも其夜はにげたりけりなシといはれん事、弓矢

とる身は、かりにも名こそおしう候へ。…」(巻四「信連」)

2 (重衡) 遠山の花は残の雪かとみえて、浦々嶋々かすみわたり、こし方行末の事どもおもひつゞけ給ふに、「さればこれはいかなる宿業のうたてさぞ」との給ひて、たゞつきせぬ物は涙なり。

(巻十「海道下」)

右の2例は、自身の不遇・不当な状況に対して言うものである。信連は御所がもぬけの殻であれば自身も汚名を着せられるであろうことを、重衡は生捕られ鎌倉へ送られるという報いを招いた宿業を、それぞれ「うたてし」と言う。

次の4例は、自分たち(一族)に起こるであろう不遇・不当な状況について言う例である。

3 (維盛) …三位中将の給ひけるは、「…かく心うきありさまにていくさの陣へおもむけば、具足し奉り、ゆくゑもしらぬ旅の空にてうき目をみせ奉らんもうたてかるべし。」(巻七「維盛都落」)

4 (知盛) 其時新中納言涙をはらくとながいて、「都を出ていまだ一日だにも過ぎるに、いつしか人の心どものかはりゆくうたてさよ。…」(巻七「一門都落」)

5 (成親北の方) 既武士共のちかづく由聞えしかば、「かくて又はちがましく、うたてさめをみむもさすがなれば」とて、十に成給

ふ女子、八歳の男子、車に取のせ、いづくをさすともなくやり出す。(巻二「小教訓」)

6 (六代) 若君母うへに申されけるは、「つゐにのがるまじう候へば、とくくいださせおはしませ。武士共うち入てさがすものならば、うたてげなる御ありさまども見えさせ給ひなんす。」(巻十二「六代」)

3と4は都落の例で、維盛は妻子を同行させれば憂き目を見せるであろうことを、知盛は頼盛が都にとどまると聞いて人の心が変わることを、「うたてし」と言う。5は成親北の方が武士に踏み込まれることを、6は六代が、武士に踏み込まれることになれば母や乳母が取り乱した様子を見せるであろうことを、「うたてし」と言う例である。

これら7例は、たとえば重衡・知盛・維盛であれば、平家の一門ともあるう私(たち)が、信連であれば「宮の侍」である自分、というように、自らの立場や身分に不相応な扱いを受けたり、憂き目を見たりすることへの悲嘆の心情を示すものである。

また6例中4例(重衡・維盛・知盛・六代)が平家の嘆きをいう例であり、数の上で目立つ。

2 他人の不適当な行動・振舞に対する感情 3例

2の1 ある行動 2例

7 (武里) とねり武里もおなじく入らんとしけるを、聖とりとゞめければ、ちからおよはず。「瀧口」いかにうたてくも、御遺言をばたがへたてまつらんとするぞ。…と、なくく教訓しけれど、

(卷十「三日平氏」)

⑧ (維盛) 海道宿々の遊君遊女ども「あないまくし。打手の大將軍の矢ひとつだにもあらずして、にげのほり給ふうたてしよ。…」とわらひあへり。

(卷五「五節之沙汰」)

維盛から遺言を託された7武里は、それを届けるため屋島へ向かわなくてはならない。にもかかわらず、「おなじく入らん」とすることを、瀧口は「うたてし」と言う。また「打手の大將軍」である⑧維盛には、軍勢を率いて敵を討伐することが期待されている。にもかかわらず、一矢も射ずに敵前逃亡したことを、遊君遊女は「うたてし」と言っている。どちらも、立場に不相応な振舞いをする⁹ことへの落胆をいう例である。

2の2 ある階級 1例

9 (武里)「瀧口」いかにうたてくも、御遺言をばたがへたてまつらんとするぞ。下臈こそ猶もうたてけれ。今はたゞ後世をとぶらひたてまつれ」と、

(卷十「三日平氏」)

9は7に続く、滝口の発話である。ここでは、武里が取るべき行動を取れない理由を、「下臈」という賤しい身分に求めている。

B 地の文(13例)

続いて、地の文の13例を見る。覚一本の地の文の「うたてし」の特徴として、係り結びの形式を取る例が多いことが指摘できる。地の文の13例のうち、「こそうたてけれ」が10例、「ぞうたてき」が1例ある。こうした例には、二重傍線を付す。

また、「うたてし」の語を含む一文の位置をみると、章段の末文に位置する例が3例(13成親・15頼政・21高倉宮)、章段の冒頭が1例(18清盛)ある。また、段落の末文が3例(14宗盛・16清盛・17清盛)、段落の冒頭が1例(22清盛)である。段落の区切りは「大丞」の判断によるものだが、内容のまとまりを把握する目安にはなる。

冒頭または末尾に位置する例が13例中8例あることから、覚一本が物語内容を統括したり、主題を示す一文で「うたてし」を使用していることが予想される。中でも清盛に関する例が8例中4例を占める点が注目される。

1 他人の不適当な行動・振舞に対する感情 10例

1の1 ある行動 3例

⑩(宗盛) …能員このよし申さんとて、御まへにまいりたりければ、ゐなをり畏り給ひけるこそうたてけれ。(巻十一「大臣殿被斬」)

⑪(京中のものども) 北条四郎策に「平家の子孫といはん人尋出し
たらん輩をいでは、所望こふによるべし」と披露せらる。京中
のものども、案内はしつたり、勸賞蒙らんとて、尋もとむるぞう
たてき。(巻十二「六代」)

12(義仲)「主上にやならまし、法皇にやならまし。主上にならう
どおもへども、童にならむもしかるべからず。法皇にならうと思
へ共、法師にならむもかしかるべし。よし／＼さらば関白にな
らう」と申せば、…(中略)。院の御出家あれば法皇と申、主上
のいまだ御元服もなき程は、御童形にてわたらせ給ふをしらざり
けるこそうたてけれ。(巻八「法住寺合戦」)

命惜しさに居すまいを正してしまふ宗盛、勸賞欲しさに平家の子
孫を尋ね求めてしまふ京の人々、法皇や主上が何であるかも知らな
い義仲が、「うたてし」と言われる。平家の棟梁に相応しくない行
いや、都を守護する者でありながら常識を持たぬことへの落胆であ
る。

1の2 ある人物 7例

a 世を乱す人物 3例

13(成親) 新大納言も、かやうに賢きはからひをばし給はで、よし
なき謀反おこいて、我身も亡^{まほ}、子息所従に至るまで、かゝるう
き目をみせ給ふこそうたてけれ。(巻二「徳大寺之沙汰」)

14(宗盛) いかなれば、小松おとゞはかうこそゆ、しうおはせしに、
宗盛卿はさこそなからめ、あまッさへ人のおしむ馬こひとつて、
天下の大事に及ぬるこそうたてけれ。(巻四「競」)

⑮(頼政) 其後伊豆国給はり、子息仲綱受領になし、我身三位して、
丹波の五ヶ庄、若狭のとう宮河知行して、さておはすべかりし人
の、よしなき謀叛おこいて、宮をもうしなひまいらせ、我身もほ
ろびぬるこそうたてけれ。(巻四「鶴」)

宗盛は平家の次男であるにもかかわらず、上位貴族を飛び越して
中納言から右大将にくわわった。官位を越えられた徳大寺実定卿は
籠居していたが、平家の信仰あつい厳島に参詣することで左大将に
出世する。「よしなき謀反」を起こした13成親は、「かやうに賢きは
からひ」をした実定卿と比較され、「うたてし」と言われる。

重盛は中宮徳子のもとを訪れた時、蛇が這っているのを見つけ、
騒ぎにならぬよう捕らえた。控えていた仲綱に蛇を渡した重盛は、
臆することなく受け取った仲綱の振る舞いを称え、「よい馬に鞍お
いて」与える。重盛は「かうこそゆ、し」い人であったのに、14宗

盛は仲綱の愛馬を無理に乞い取って金焼をして「天下の大事」を招いた。宗盛もまた、「ゆゑし」と評された重盛と比較され「うたてし」と言われる。

15 頼政は、和歌に優れ、鶴を射た高名も得た人物で、「伊豆国給はり」「三位」にまで昇進した。今年は七五歳であり、そのまま無事に過ごせたであろう「人」が、「よしなき謀叛」を起こしてしまつたことを「うたてし」と非難されている。

先にみた⑩宗盛が、居ずまいを正すという個々の行動への「うたてし」であつたのは異なり、これらは「よしなき謀反」を起こした成親と頼政、「天下の大事」を招いた宗盛、というように、世を乱した人物に向けての「うたてし」である。

こうした世を乱す人物への「うたてし」からは、「情緒的拒否感」だけでなく、「理知的」な側面も多分に取看されよう。

b 人の思い嘆きを積もらせる人物 4 例

次の4例は、鬼界島に流された三人のうち俊寛だけが赦免されなかつたこと、小督が尼にされことを「うたてし」と言う例である。

16 (清盛) 大治二年九月十一日、待賢門院御産の時、大赦ありき。

其例として、今度も重科の輩おほくゆるされける中に、俊寛僧都一人、赦免なかりけるこそうたてけれ。 (巻三「御産」)

17 (清盛) 怨霊は昔もおそろしき事也。今度さしも目出たき御産に、

『覚一本平家物語』の「まさなし」と「うたてし」

大赦をこなはれたりといへ共、俊寛僧都一人、赦免なかりけるこそうたてけれ。 (巻三「頼豪」)

18 (清盛) 去程に、鬼界が嶋へ三人ながされたりし流人、二人はめしかへされて都へのほりぬ。俊寛僧都一人、うかりし嶋の嶋守に成にけるこそうたてけれ。 (巻三「有王」)

19 (清盛) 小督殿出家はもとよりの望なりけれ共、心ならず尼になされて、年廿三、こき墨染にやつればはてて、嗟哦のへんにぞすまられる。うたてかりし事共なり。か様の事共に御惱はつかせ給ひて、遂に御かくれありけるとぞきこえし。 (巻六「小督」)

池田氏は、この16～19と20(成親)の5例をあげて、「悲惨な有様に対する嫌悪」と共に(清盛が…引用者注)『悲惨な有様を招いたことへの非難』が含まれると今一步踏み込んで解釈することも可能かもしれない」と述べる。氏の指摘する通り、清盛への非難を読み取るべきところである。ただしその非難の対象は、覚一本が清盛の行動に対して「うたてし」という評を繰り返すことと、その行動がもたらす事態の甚大さを考え合わせるならば、「悲惨な有様を招いたこと」にとどまらず、清盛という人物への非難とも考えられるのではないだろうか。

まず16「御産」は、法皇直々の祈祷のなか安德天皇が無事に誕生したことを記す、おめでたい章段である。そのさなかに「俊寛僧都

一人、赦免なかりけるこそうたてけれ」の句が挿入されている。17「頼豪」でも、「目出たき御産」にもかかわらず、と言いついて同文を繰り返している。18でも、俊寛の最期を語る章段（「有主」「僧都死去」）の冒頭に、ほぼ同句を置く。こうした挿入句は、延慶本にみられない。

「僧都死去」の章段は「か様に人の思歎きのつもりぬる平家の末こそおそろしけれ」という一文で閉じられており、俊寛が「うかりし嶋の嶋守」として落命したことは「人の思い嘆き」を象徴する出来事とされている。

遠く異朝をとぶらへば、秦の趙高、漢の王莽、梁の朱异、唐の禄山、是等は皆旧主先皇の政にもしたがはず、楽みをきはめ、諫をもおもひいれず、天下のみだれむ事をさとらずして、民間の愁る所をしらざッしかば、久しからずして、亡じにし者どもなり。

（巻一「祇園精舎」）

冒頭の「祇園精舎」を思い起こせば、「民間の愁る所」を知らないことは、滅びの因である。難産でもあった皇子誕生は、一門とつて悲願の叶った瞬間であった。こうした場面で禁忌をおかすように、俊寛の悲嘆を持ち出し慶事に水を差す。覚一本は、清盛が滅びの因となる「人の思い嘆き」を積もらせてゆくことを執拗に繰り返すことで、平家の滅びが避けがたく迫っているという印象を強くしてい

る。

19の、高倉上皇の寵愛した小督を清盛が尼にしたことも「うたてし」と評される。引用部にあるように、高倉上皇は清盛の小督への仕打ちに心を痛めて、命を落とすことになる。これも、「人の思歎きのつもり」の最たる例である。

延慶本では、「小督局、心ナラズ尼ニナサレテ、口惜トモ云計ナシ」と小督の無念な心情を述べつつも、「齢八十二テ、日来ノ念仏ノ功積リ、臨終正念ニテ、往生ノ素懐ヲ遂給フ」と往生を記す。こゝでも清盛という人物を非難しようとする、覚一本の意図は明確である。

平家の棟梁である宗盛、三位にまで出世した頼政、大納言であった成親は、その地位に似合った行動・判断ができず、「天下のみだれ」を悟らなかつたどころか、それを引き起こした人物である。同様に清盛も、太政大臣まで極めた人物でありながら相應しい振る舞いができず、人の思い嘆きを積もらせた人物であった。覚一本の「うたてし」は、落胆や非難を示す人物評としても機能している。

2 他人の不遇・不運に対する感情 3例

20（成親）…岸の二丈ばかりありける下にひしをうへて、うへよりつきおとし奉れば、ひしにつらぬかッてうせ給ひぬ。無下にうた

てき事共也。ためしすくなうぞおほえける。

(卷二「大納言死去」)

おわりに

②(高倉宮) いま五十町ばかりまちつけ給はで、うたれさせ給けん宮の御運のほどこそうたてけれ。

(卷四「宮御最期」)

②(清盛) 凡はさい後の所労のありさまこそうたてけれ共、まことにはたゞ人ともおほえぬ事共おほかりけり。

(卷六「築嶋」)

20 成親は配流先で夢に貫かれて殺され、②清盛は焦熱地獄を思わせる熱病を患って苦しみ死ぬ。①高倉宮は南都に落ちる途中で首を取られ、こうした最期を遂げざるを得なかった「御運」を「うたてし」と言う。いずれも身分ある人物が、見るに堪えない無惨な最期を遂げたことを「うたてし」という例である。

20 成親の例は池田氏の指摘するように、悲惨な死に様への嫌悪感と同時に、その死をもたらした清盛への非難をも読み取るべきである。この例を含めると、清盛への非難を示す例は5例になる。

「よしなき謀叛」を企て世を乱した成親と、「人の思い嘆き」を積もらせた清盛は、「うたてし」と非難された人物であった。彼らの悲惨な最期もまた「うたてし」と評されることを考え合わせれば、「うたてき」人物は、「うたてき」最期を迎える、という覚一本の因果律を読み取るべきかもしれない。

本稿では、覚一本の「まさなし」8例と、「うたてし」22例について検討してきた。どちらも他者に対して負の評価を下す時に用いる語だが、冒頭に示した戦場からの逃走をいう例に即して説明すると、次のような違いが指摘できる。

まず「まさなし」は、武士が戦場で利害関係が生じている相手の、規範や共通感覚に反した言動をとがめる語であり、「してはならないこと(だ/です)」と、相手の行動を制する語である。対して「うたてし」は、規範からの逸脱を問題にするのではなく、「打手の大將軍」という立場に当然期待されている行動を取ることが出来ない人物に対して、「○○ともあろう人が、ゝするなんて」と落胆の意を示す語であった。

「うたてし」が他者に向けられる時は、立場や身分に不相応な行いへの負の評価を示すが、自身に向けられる時には、自らの立場や身分に不相応な扱いを受けたり、憂き目を見たりすることへの悲嘆の心情を示す。自身の悲嘆をいう「うたてし」は、6例中4例が平家方の例であるなど、滅びゆく人物の心情を言う例が多い。

覚一本の特徴として、特定の行動や個々の状況への批評にとどまらず、人物評としても使用されることが指摘できる。これらは「よ

しなき謀叛」を起こした藤原成親や源賴政、「天下の大事」を招いた平宗盛、そして平清盛と、いずれも、世を乱した者への非難である。これらが物語内容を統括する批評句として機能していることは、話の冒頭や末尾に位置することや、係り結びの形式を取ることが多いことから窺えた。そして覚一本は、「人の思い嘆き」を積もらせた清盛に対して「うたてし」と繰り返すことによって、平家滅亡の枠組みをより鮮明にしている。

次稿では延慶本の検討を行い、覚一本との相違を明らかにしたい。

注

- ① 城阪早紀『『平家物語』一谷合戦「二二之懸」考——覚一本と延慶本の異同——』『軍記物語の窓』五、和泉書院、二〇一七年。
- ② 『覚一本平家物語』の引用は、以下による。『影印』『平家物語』（龍谷大学善本叢書）思文閣出版、一九九三年。「翻刻」高木市之助ほか校注『平家物語』（日本古典文学大系）岩波書店、一九五九～六〇年。引用の際には『日本古典文学大系』の判断を尊重し、促音・撥音を小字で補い、補読箇所も本文と同様に扱った。また心内語に「」を付すなど一部表記を改めた。巻一～六は上巻、巻七～十二と灌頂巻は下巻である。
- ③ 『延慶本平家物語』の引用は、以下による。『影印』大東急記念文庫蔵本影印、汲古書院、一九八二～三年。「翻刻」北原保雄・小川栄一編『延慶本平家物語』勉誠出版、一九九九年（初版一九九〇年）。延慶本注釈の会編『延慶本平家物語全注釈』汲古書院、二〇〇五年～二〇一九年。
- ④ 池田敬子「覚一本の選択——二位尼と二つの遺言——」『軍記と室町

物語』清文堂、二〇〇一年。

- ⑤ 池田敬子『平家物語』と『太平記』のことは『国語と国文学』八五・一一、二〇〇八年一月。

⑥ 池田敬子『平家物語』と『太平記』のことは(一)——形容詞「あさまし」の語義——『文芸論叢』七八、二〇二二年三月。

⑦ 池田敬子「形容詞「うたてし」の語義——『平家物語』と『太平記』のことは(二)——『軍記物語の窓』四、二〇二二年。

⑧ 鈴木彰「まさなうも敵にうしろをみさせ給ふものかな——詐術としての熊谷直実の言葉——」『歴史と民俗』二八、二〇二二年二月。

⑨ 「もつたいなし（勿体無）」は中世から見える語で、覚一本・延慶本に例がない。ただし『源平盛衰記』には2例あり、頼朝の発語「知康が申状二依テ、合戦ノ御結構、勿体ナク覚」（巻三四「公朝時成開東下向」と教経が通盛に向けて言う「初解広ゲテ、思事ナクオハスル事勿体ナシ」（巻三六「通盛請小宰相局」）である。現代語を当てるのであれば「もつてのほかだ」が適当であろう。

⑩ 「まさなし」は、覚一本以前にも規範や共通意識に反する言動をとがめる場面で使われる。『枕草子』の例は、年長者が守るべき言葉の使い方と反するものを「まさなきこと」（正しくない言葉）と言い、『宇津保物語』の例は、二歳のいぬ宮に対し、「女の赤ちゃんにしては活発すぎるいたずら振りな戒め」る時に使われる。（『日本古典文学大系』頭注）「まさなきこともあやしきことも、大人なるは、まのもなく言ひたるを、若き人はいみじうかたはらいなきことに、消え入りたるこそ、さるべきことなれ。〔『枕草子』一八六段「ふとお心とりとかするものは」〕

・いぬ宮、這ひ出で給ひて、物どもに取りかかりて、つかみこほし給へば、父君、「この人こそ、いとまさなけれ。かかるわざは、女はせぬものぞや。…」〔『宇津保物語』「国譲中」〕

⑪ 本稿で問題にするのは、実際の合戦で守られていた規範ではなく、物語中に描かれている規範である。

⑫ 「自害してはいけません」は、相手に禁止の意を伝える表現である。「反対以上の意味はない」としてよいかという疑問も残るが、「単怯にも」のように相手の非を責める意を含んでいないという主張であろう。

⑬ 諸注を概観すると、『三弥井古典文庫』の頭注は、「いけません」とあり、『大系』と同じ。やや丁寧に「よろしくありません」とするのが、『平家物語評講』と『新日本古典文学大系』である。ただし『平家物語評講』は、「まさなうも」は「ある行動を非難することば」と言い添える。重衡の行動を強く否定するものとして、『校注古典叢書』の「とんでもないことをなさいませ」と『新編日本古典文学全集』（「自害など」）いけません、とんでもないことです」がある。

⑭ たとえば、巻九「六ヶ度軍」に平教経が降人になった沼田次郎を福原へ連れていく例がある。降人はその場で斬らず、本拠地へ連れて行くことが慣例であったと思われる。

⑮ 『日本国語大辞典（第二版）』は、土佐房の例を「(二) その時その時の予想や期待に合致しない」「(2) 予想・期待に合わず、いけない」の例としてあげる。

⑯ 「うたてし」(シク活用) 1例、名詞「うたてさ」2例、名詞「うたてし」1例、形容動詞「うたてげなり」1例。

参考文献・引用文献

- ・中村幸彦編『角川古語大辞典』角川書店、一九八二年。
- ・中田祝夫・和田利政・北原保雄『古語大辞典』小学館、一九八三年。
- ・室町時代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典(室町時代編)』三省堂、一九八五～二〇〇一年。

- ・日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』(第二版) 小学館、二〇〇〇～二年。

- ・築島裕編『古語大鑑』東京大学出版会、二〇一一年～現在刊行中。

- ・市古貞次『平家物語辞典』明治書院、一九七三年。

- ・高木市之助ほか校注『平家物語』(日本古典文学大系) 岩波書店、一九五九～一九六〇年。

- ・佐々木八郎『平家物語評講』明治書院、一九六三年。

- ・富倉徳次郎校注『平家物語全注釈』角川書店、一九六六～一九六八年。

- ・市古貞次校注・訳『平家物語』(日本古典文学全集) 小学館、一九七三年～一九七五年。

- ・水原一校注『平家物語』(新潮日本古典集成) 新潮社、一九七九～一九八一年。

- ・山下宏明校注『平家物語』(校注古典叢書) 明治書院、一九七五～一九七九年。

- ・梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』(新日本古典文学大系) 岩波書店、一九九一～一九九三年。

- ・市古貞次校注・訳『平家物語』(新編日本古典文学全集) 小学館、一九九四年。

- ・佐伯真一校注『平家物語』下(三弥井古典文庫) 三弥井書店、二〇〇四年。

- ・美濃部重克・榎原千鶴校注『源平盛衰記』六(中世文学) 三弥井書店、二〇〇一年。

- ・松尾聰・永井和子校注・訳『枕草子』(新編日本古典文学全集) 小学館、一九九七年。

- ・河野多麻校注『宇津保物語』三(日本古典文学大系) 岩波書店、一九六二年。

『覚一本平家物語』の「まさなし」と「うたてし」

・室城秀之校注『うつほ物語 全』おうふう、一九九五年。

〔付記〕 本稿は、JSPS科研費20K21989の成果の一部である。